



パスタとちくわ

もう10年以上前のことだ。東京で社会教育を実践する先輩を手伝っていた頃、青少年施設に日本の学生と海外の学生を50人ずつ集めて合宿しながら交流を深めるプログラムを行った。順調に進み、4日目が過ぎた頃のことである。一人の外国人学生の姿が見えないと現場がざわつ

いた。

イタリアから参加していたその学生に最後に会った学生は「あまり元気がなかった」と言うから、こちらも大慌てで施設内を捜して回ったのだが姿はない。車を出してスタッフ総出で近隣を捜していた時、携帯電話に「近くのコンビニで見つかった」と連絡が。ほっとしながらそのコンビニに急いだ。

そこには涙を浮かべて買い物袋を提げた学生が立っている。私が「どうしたの」と声をかけても、彼はうまく話せない。「買い物をしたの？ 何を買ったの」と話しかけると彼は「パス

タを食べないと元気が出ない」と言って大粒の涙をこぼしながら袋を差し出した。その中にはなんとパスタではなく小さなちくわが入っていた。学生の無事が確認できた安堵からか、パスタとちくわの妙な取り合わせからなのか分からないが、居合わせたスタッフも涙を流し抱き合っていた。もちろん帰りの車内では涙が笑顔に変わり、笑い声が絶えなかったのだが、本当に肝をつぶした。

青少年施設に戻り、このことを参加学生に話すと彼らは「お国自慢料理大会」をしたいと提案してきた。計画されていたプ

ログラムを中止し、彼らの提案に沿ってパーティーを開いたところ、新しい笑顔でイキイキと交流していた様子がとても印象深かった。もちろん、パスタも作った。最後にイタリア人学生がこんなことを言った。「本場のパスタではなかったが、皆で作ったこのパスタの味は忘れられない」

計画通りも大切だが、こんな思わぬ展開に期待し、ワクワクできる大人であり続けたい。

たかみ・だいすけ 日本文理大 人間力育成センター長。専門は初年次教育、ユースワーク、ボランティア論。別府市在住。40歳。